

京都における明治百年祭（一九六八）イベント

— 独立プロ映画『祇園祭』と「京都」イメージの形成 —

ト・パチヨール・ハサン

一 はじめに

一九六八年一〇月三日に日本では明治元年から一世紀立ったことを記念するために「明治百年祭」イベントが行われた。佐藤栄作内閣によって企画された本イベントのために日本全国各地において様々な事業や行事が行われた。時期的に、日本の近代化の「現在」をテーマに掲げた「東京オリンピック」（一九六四）と工業的な「未来」を意味していた「大阪万国博覧会」（一九七〇）の間にある「明治百年祭」は「過去」にスポットを当てた日本の重要なメディア・イベントの一つである。しかし、「東京オリンピック」や「大阪万

博」に関する先行研究と比較すると「明治百年祭」に関する研究は圧倒的に少ない。

「明治百年祭」イベントの内容を検討してみると、地域によって行われたイベントが異なることがまず目に付く。しかし、場所によってイベント自体の内容が異なっている、ほとんどのところでは国民に伝えようとするメッセージが佐藤栄作内閣の意図した「日本国民に過去を考えさせ、ここから日本のために頑張ってきた先人に感謝させる」と一致していた。他十方で、京都の「明治百年祭」を検討してみると、「過去の先人に感謝する」などの国民的イベントよりも、京都市民や府民を中心にした性格が数多く見られる。社会党・

共産党を与党とする嵯川虎三知事の下で行われた京都のイベントは、京都の「自治精神」の伝統、町衆的な暮らしなどを京都人だけでなく、日本国民にみせることで「革新的な」京都をブランド化させることを目的にしていた。

京都を中心にしていた様々なイベントの中で、メディア研究として最も重要なのが映画『祇園祭』である。

これは、記念映画として「明治百年祭」を祝うために作られた映画であった。しかし、テーマは「過去百年間の先人」の明治時代ではなく、千年以上の歴史のある祇園祭だった。それにもかかわらず、あるいは、だからこそ、映画『祇園祭』は日本全国で上映され、短期間に大ヒットした。これは独立のプロダクションの映画が日本で大ヒットする始めてのものとして映画史上の一つの転換点でもあった。

日本各地においても、「明治百年祭」を記念する様々な映画が作られた。例えば、福島では記念映画『福島百年』、東京では『東京百年セ・ミ・ドキュメント風映画』、

兵庫では『府政百年記念映画』、高知県や広島県、あるいは群馬県では『記録映画』が企画制作されている⁽¹⁾。しかし、以上の作品は、名前からも明らかのようにその地域の過去一〇〇年間の歴史をテーマに掲げたものであり、明治時代が始まった一八六八年から一九六八年までの社会変化をドキュメンタリーとして見せている。例えば、『読売新聞』（一九六六年一月二三日）

によると、東京の場合、百年のドキュメントと現在の東京を四節に分けて収録した記念映画の二本が製作されている⁽²⁾。内容は東京の百年間での移り変わりを都民に理解させ、次の世代に残すことが目的とされている。京都の場合、明治よりはるか前の「過去」イメージを表す映画『祇園祭』が選ばれたことに意味がある。そして、この映画が観光都市・京都のイメージに与えた影響を明らかにすることも本稿の二つ目の目的である。

従って、第一節ではまず映画『祇園祭』が企画段階から、上映されるまでの道筋を説明する。第二節では、

映画のストーリーとそれに対する批判など、様々なメディアの反応について検討する。第二節では、映画『祇園祭』が「京都」イメージに与えた影響について実例も示しつつ明らかにする。最後に、メディア・イベントとして映画『祇園祭』が持つ意味をまとめる。

二 映画『祇園祭』の背景と日本映画復興協会の

まずは、映画『祇園祭』の企画から撮影に至るまでのプロセスを、日本映画復興協会の設立及び中村錦之助（後に萬屋錦之介として名前が変わるが以下では中村錦之助と呼ぶ）にスポットを当て、一九六一年から一九六八年一〇月一九日の公開までの概要について河内将芳『祇園祭と戦国京都』（二〇〇七年）の記述を中心に紹介したい。^③

映画『祇園祭』はまず、一つの紙芝居から出発する。^④

一九五〇年、立命館大学の日本史専門家である林屋辰三郎教授が中心となって京大生らと一緒に紙芝居『祇

園祭』を製作した。これは、応仁の乱後に京町衆たちの自治体制がつくられ、その市民的なエネルギーによって祇園祭が復興された史実を紙芝居にしたものだった。この原紙は六〇年代に紛失し、それが再発見されたのは二〇〇七年である。「国民的歴史学運動」の代表例とされる、紙芝居『祇園祭』は二〇〇七年五月に立命館大文学部の田中聡・非常勤講師を代表に「戦後歴史学ワーキンググループ」が、紙芝居のオリジナル版（五八枚）を撮影したスライドフィルムや複製の一部（二一枚）、台本などが入った段ボール箱を発見した。『朝日新聞』（二〇一四年七月八日）は、「祇園祭をよみがえらせた町衆の精神を思い起こし、日本を立ち直らせよう。紙芝居に込められたのは、戦後復興への願い。京都市内を中心に巡回公演された」と紹介し、紙芝居『祇園祭』が持つ重要な意味について指摘している。また、『毎日新聞』（二〇〇八年七月二日）は紙芝居『祇園祭』についてさらに詳しく述べている。

創作したのは「民主主義科学者協会京都支部歴史部会」に所属していた京大生ら。最新の歴史学の成果を分かりやすく伝える『国民的歴史学運動』の一環として、学校などを巡って上演していた。五〇年代後半から運動が退潮に向かい、紙芝居も廃れた。しかし六〇年代、紙芝居の筋書きを基に小説や映画が作られ、町衆と武士の対立の中で祭りが復興したイメージが広く普及していったという⁽⁶⁾。

また、学術的には異論もあるとしながらも、「祇園祭Ⅱ町衆」を決定的に印象づけた作品として、これを発見した立命館大文学部の田中聡は「戦後復興期の歴史意識を探る上で貴重な資料だ」と話している。ちなみに、河内将芳は「戦国時代の祇園祭も町衆の力だけでなく、比叡山延暦寺や幕府の意向で成り立っていた。実際の歴史とは違うイメージを広めた紙芝居の発見は歴史を検証するいい機会だ」と述べている。さらに『読

売新聞』（二〇〇八年七月二日）によると、再発見された紙芝居『祇園祭』のために二〇〇八年七月二三日（午後一時半）に京都会館大ホールで「祇園祭くよみがえる歴史とイメージ」というタイトルで市民講演会も行われた。そして、講演会は日本史研究会などの主催で、河内将芳と田中聡が招待され、紙芝居「祇園祭」が半世紀ぶりに実演されている⁽⁷⁾。

伊藤大輔監督は戦前の『忠次旅日記』（一九二七年）三部作、戦後の『王将』（一九六二年）と『反逆児』（一九六一年）など男の苦しみを描いた作品で有名で、「時代劇の父」とも言われるが、この紙芝居に興味を持ち、紙芝居台本を入手してから映画『祇園祭』の企画を始めた。

一方、一九六一年にこの紙芝居からヒントをえた西口克己の小説『祇園祭』が出版されると、それを読んだ俳優中村錦之助がぜひ自分でやりたいと言いついた。中村は、伊藤監督もこの企画に熱心であることを知ると、二人の共同戦線を呼びかけた。伊藤監督はこの小

説を底本に中村錦之助主演で映画化する企画を東映に提出する。だが、検討の結果、「映画製作費が高い」「こんなお金を使つて、時代劇を作るには、利益のリスクがある」などの理由から東映は映画化案を却下した。

当時、時代劇に固執する中村錦之助と東映との溝は深まる一方であり、錦之助もまた納得できる時代劇を作るため、自らスポンサーを探していた。結局、中村錦之助は一九六六年に東映依存をやめ、東映との専属契約を解消した。中村は京都に移動し、資本金三百万円の株式会社「日本映画復興協会」を設立し、スポンサーを探し続けた。ついに一九六七年、プロデューサー・竹中労が府政百年記念事業として京都府に映画「祇園祭」の企画を持ち込んだ。当時の京都府知事である蜷川虎三氏は「京都は日本映画発祥の地であり、そこから産業としての映画復興の狼煙を上げるのは、実に意義深いこと」と全面的バック・アップを表明する。京都府の取り組みについて『府政だより』（一九六七年）

は、この映画の意義を次のように述べている。

「この映画は、祭りの背景となっている京都の町や庶民の姿、文化の移り変わりなど歴史的な面を広く紹介しようというものです。府は、府民の歴史を記録として保存し、また、京都産業として発展してきた映画産業に寄与するため、資料を集め、協力会をつくるなど積極的に協力します」。

また、京都府の協力についても『朝日新聞』（一九六七年八月二三日）は、「中村錦之助主演、伊藤大輔監督の時代劇映画『祇園祭』が、京都府・市の前面的な努力を得て、一月から撮影を開始する」と報道している。⁽⁹⁾『読売新聞』でも「京都府および京都市の協力」でカラー、ワイド二時間半の映画『祇園祭』の製作が可能になったとし、中村錦之助の安堵の声、映画製作への意気込を伝えている。⁽¹⁰⁾「東映時代から伊藤先生とあたためていた念願の計画です。〈略〉ものすごく張り切っていると同時に、大きな責任も感じています」。⁽¹¹⁾

三 映画『祇園祭』のストーリーとメディア

映画『祇園祭』のストーリーについて、二〇一三年の祇園祭のために発行された、「祇園祭記念特別上映『祇園祭』京都文化博物館フィルムシアタープログラムに詳しく載っているが、それを簡単に要約しておく。⁽¹²⁾

足利幕府の政権闘争に端を発した応仁の乱以後、京の町は絶え間ない戦禍の渦に巻き込まれ、農民たちの不満は土一揆となつて爆発する。主人公の染物職人の町衆である新吉(中村錦之助)は、不本意ながら殺し合いに参加する事となり、何かが間違っていると強く感じる。町も戦火で焼け落ち、侍への不信感が募っている。新吉は、「そもそも土一揆の原因とはいったい何なのか。また、この状況で得をしているのは誰なのか。町衆や百姓といった弱いもの同志を争わせ、利益を得ているのは、侍ではないのか」などの疑問を抱きはじめる。やがて新吉ら町衆は、自らの手で町を守り殺し

合いではない、町衆らしいやり方で侍に対抗しようと考えるに至る。その団結力の証として、三〇年間途絶えていた祇園祭の復興を決意する。一方、新吉は笛の名手であつた美女、あやめ(山田志麻)に会う。あやめは「かわら者」と呼ばれる被差別地域の出自であつたが、同じく笛の名手である染物職人の新吉は彼女に強く惹かれていく。新吉にとって、三〇年前に途絶えた祇園祭の復興は、侍の支配からの脱却、さまざまな階層の人々が思想や身分を超えて団結する革命と自治の象徴的な事業だつた。しかし、その思惑を見抜いた支配階級の側からは、新しい課税、食料配給の差し押さへなど、さまざまな妨害が入り、祭りの準備は遅々として進まない。祭りの日程が決まってから、侍の側は準備を中止させようとする。町衆の心も一度は萎えそうになるが、新吉の見事な演説で盛り返した民意により山鉾の準備が無事に完成する。そのお囃子は、あやめと新吉の共同制作であり、みんな晴れがましい自分たちのお祭りに歓喜する。

祭りの日に、山鉾巡行をその場で阻止するために待たれが緊急出動する。町衆が人間の鎖で侵入を阻止するが、この騒動の最中に新吉に矢が当たってしまう。新吉は、山鉾の前で熊左（三船敏郎）に担いでもらった戸板に揺られながら山鉾をリードし続ける。万感の思いで山鉾を見上げ、祇園祭の復興に成功した新吉は、そこで微笑みながら息絶えた。

この映画『祇園祭』について新聞記事を検索してみると、撮影中に予算が足りない、プロの役者が不足するなど様々な混乱があったことが判る。それに対して、京都銀行をはじめとした地元企業と京都府民が資金的援助を行い、エキストラとしても協力している。『読売新聞』（一九六八年一月一七日）はこう報じている。「この映画は、もともと京都府百年記念事業の一つとして、嵯川虎三知事が府自体でやってもよいとまで考えていたもの。いろいろな政治的トラブルの末、府が京都銀行から寄付された五千万円を映画制作費に貸し付けることに決定した」⁽¹³⁾。

錦之助は映画の撮影に関して、「どんな映画でもまず客の入る映画をつくれ、という人もいます。しかし、本当に映画を愛する人なら賛成できないはず。まず、立派な面白い映画をつくって、お客さんを感じさせることが大切です。今大切なのは、映画はやはりテレビより楽しいと、人に思ってもらうことです」と述べ、東映の方針を批判しながらも、映画『祇園祭』の製作に執念を燃やしていた。⁽¹⁴⁾ かくして様々な困難を越え、映画『祇園祭』の撮影は一九六八年一月一九日に終わる。⁽¹⁵⁾ 上映が始まるとともに、日本全国からこの映画に対して熱烈的な共感が示され、『祇園祭』は「京都」イメージだけではなく、日本映画界にも大きな影響を与える。

四 「京都」イメージにおける映画『祇園祭』の効果分析

映画『祇園祭』は一六七分におよぶ長大なものであり、鉾一基を新調するのにかかった費用が、当時の金額で五百万円、セットの総制作費にいたっては七千万円、それに、のべ一万五〇〇人のエキストラが投入され、映画は完成した。

映画『祇園祭』は日本全国で上映が始まると大ヒットし、日本映画のロングラン記録を更新した。⁽¹⁶⁾『朝日新聞』(一九六八年二月三日)は、この映画の成功についてこう分析している。『祇園祭』は洋画系ロードショー劇場で全国一斉公開される点が注目されていたが、二週目に入ってから逆に客足が伸びるという快調ぶり、正月興行まで続映される見通しが強くなった。いずれにせよ日本映画のロングラン記録を更新することとは確実だ。⁽¹⁷⁾京都での観客動員数に関する情報ではないが、東京のいくつかの映画館について、『朝日新聞』

(一九六八年二月一五日)では、「二週目の日曜日を迎えた二月一日、『祇園祭』の観客数は東京の渋谷・パシオンが四千八百人、新宿ミラノが五千六百人、松竹セントラルが四千人。正年までに指定席券が売切れる劇場もあった」と報告されている。⁽¹⁸⁾

日本映画史上、映画大手五社以外の製作会社・配給会社によるヒット作は類例がなく、まさに画期的出来事であった。マスコミュニケーション研究者(当時・東京大学助教授)である高木教典もこう言及している。「松竹映配と新日本興業の洋画専門館でロードショー上映された『祇園祭』が成功するなど、このところ映画大手五社の邦画系統館以外で上映された映画が大ヒットしているのがひとつの傾向である」。⁽¹⁹⁾つまり「日本人が時代劇に関して興味を持ち続ける」とことと「映画産業の中の大手五社独占を止める」という二つの意味で、『祇園祭』は日本映画産業の将来に大きな影響を与えたのである。

他方で、河内将芳『祇園祭と戦国京都』(二〇〇七年)

には映画『祇園祭』に対する批判も展開されている。映画『祇園祭』は、莫大な費用と人員を投じて製作された大作であったが、「あいも変わらず、町衆と侍たちとの対抗関係がそのストーリーの骨格となっている」⁽²¹⁾ 勸善懲惡作品と批判する。河内はさらに、「一見すると、なぜこうもはつきりと、敵と味方、あるいは、あちらこちらといった分けかたをしなければならなかったのか、不思議にさえ感じられる」と疑問を提示するだけで、その二項対立のゆえんについては踏みこんでいない。しかし、明治百年祭の政治性という文脈で映画『祇園祭』を捉えかえすと、むしろこの二項対立こそが重要であったことが判るだろう。国家権力に対抗する民衆の祭礼という祇園祭イメージが、「現代」を描くこの時代劇映画を通して強化されたのである。

それにしても、日本全国で関心を集めた『祇園祭』の観客の反応はどうだったのか、またそれは「京都」イメージにどのような影響を与えたのだろうか。それを推測するために、京都市統計書⁽²²⁾のデータを利用し、京

都に訪問した観光客数を分析した。以下に見るのは、一九六〇年から一九七五年の間、京都の観光客数をグラフしたものである。

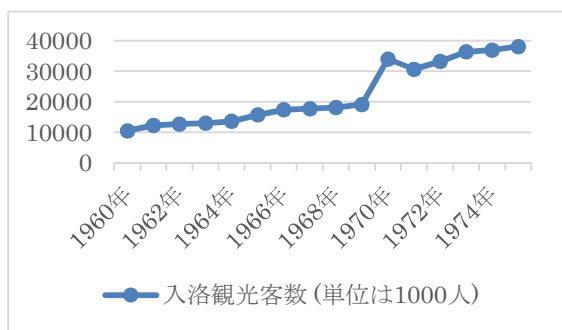
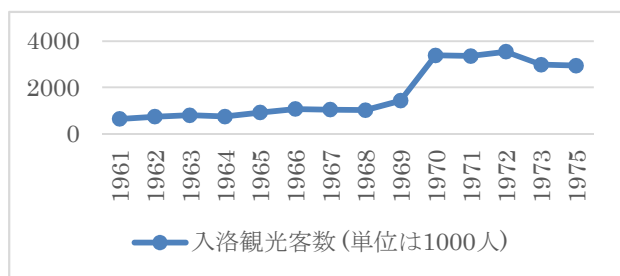


図1. 入洛観光客数

図1から明らかなように、映画が上映された一九六八年以降、京都の観光客数には増加傾向を示している。特に一九七〇年の急激な増加は大阪万博の影響だと考えられるが、もし、万博の盛り上がりによる一時的現象にすぎなかったなら、万博の終了後に減少したはずだろう。確かに一九七一年は一九七〇年と比べ減少しているが、にもかかわらず、一九七一年の観光客数は六八年より非常に高いし、一九七一年から連続的に増加している。

七月一七日の前祭と二四日の後祭の二つに分かれていた祇園祭が一本化したのは一九六六年であり、各新聞や統計を検討しても、一九六六年以前の観光客数の厳密な数字は確認できない。そこで、祇園祭の観光客数のヒントになるものとして、京都市統計書の七月の観光客数を検討する。七月に京都に訪問した観光客に関するグラフは以下のように変化している。こうした増加に映画『祇園祭』が寄与した可能性は否定できない。

図2. 入洛観光客数(七月)



実際、一九六五年から一九六八年までほぼ一〇〇万人程度であった七月の観光客数は映画上映が終了した翌年七月に、約五〇％増加している。そして、一九七〇年から倍以上増加し、以後も一九六八年レベルに減少することはない。

また、日本の観光雑誌である『旅』を検討すると、この観光客数の増加が「京都」認知の高まりだとする解釈を支持する変化が見られる。一九六〇年から一九六八年の八年間、京都への旅行が特集に載ったのは三回だけであり、それは、『特集／京都・奈良』（一九六一年一〇月号）、『特集／京都一九六五』（一九六五年一〇月号）と『特集／京都—その新しい楽しみ方』（一九六七年十一月号）である。それに対して、一九六八年の映画上映から一九七五年にかけての八年間では、八回も京都特集が組まれている。⁽²³⁾ 大阪万国博覧会が行われた一九七〇年にしても、『特集／京都の夏祭り』と万国博見物法』（一九七〇年八月号）では、万博とともに京都がすすめられ、特に祇園祭が強調されている。

映画『祇園祭』の上映が終了して以降、京都を訪問した観光客数が目立って増加した。もちろん、一九七〇年に行われた大阪万国博覧会の影響で日本全体で観光客数が増えているため、映画『祇園祭』の「京都イメージ」が直接影響した範囲は限定的かもしれない。しかし、映画の上映が終了し、次の祇園祭（一九六九年）に参加した観光客数は約五〇パーセントも増加していることは一つの解釈を可能にするだろう。一九六九年の祇園祭が行われた時、大阪万国博覧会開始まではまだ一年近くあったため、その人達は大阪万国博覧会を訪問し、ついでに祇園祭に参加するものではなく、わざわざ祇園祭のために来た人たちだったにちがいない。

五 まとめ

戦後日本の重要な国家イベントの一つである「明治百年祭」では日本全国各地で様々な事業・行事が計画

された。例えば、「明治百年記念土緑化運動」、「明治百年記念博物館」、「明治百年記念『青年の船』」など多数のものがある。その一つに「明治百年記念映画」があるが、京都以外の「記念映画」のテーマはその自治体の過去百年間の歴史をドキュメンタリーとして見せるものであり、京都だけが明治元年からの話ではなく、それよりも四百年古い「応仁の乱」をテーマに掲げた記念映画を製作した。

それは一九五〇年に林屋辰三郎が京大生らと一緒に製作した紙芝居『祇園祭』、これにヒントをえた西口克己による小説を素材にしている。時代劇の父とも言われた伊藤大輔監督はこの小説『祇園祭』に興味を持ち、作品のイメージをふくらませていた。やがて「これは是非映画にしたい」と言い出した中村錦之助と伊藤大輔の共同戦線ができ、企画は東映に提出された。しかし、「利益のリスクがある」、「制作費が高い」などの理由で却下された。株式会社日本映画復興協会を設立した錦之助は、京都でスポンサーを探し続け、ついに府

政百年記念事業として京都府が企画を全面的バック・アップするにいたる。

応仁の乱により三〇年間に途絶えていた祇園祭の復興をテーマに、ラプストリーもからませた映画『祇園祭』は、その撮影にも様々な困難にあつた。しかし、京都府をはじめ、京都銀行など企業がお金を援助し、役者としても京都府民一万人がボランティアとして協力したおかげで映画は完成した。

この映画を日本各地の日本人に見せるために一万人のボランティアが集まったことなどは、応仁の乱の後、祇園祭の復興のために努力した町衆のモチベーションと類似していると見ることもできよう。この意義を秋からにしたことが本論文の一つ目のポイントである。

映画『祇園祭』は一九六八年十一月三日に公開され、映画館によってチケットが数日間売り切れになり、上映期間が延長になった。テレビの普及の影響により一九五八年のピークから、徐々に減少してきた映画館

の観客がこの映画がまた映画館に引き戻すことに成功したのである。また、映画『祇園祭』は独立プロダクションが日本でヒットしたはじめてのものだった。これは、日本映画史上において一つの転換点でもあった。映画『祇園祭』を日本映画史上においてこのような重要な役割を果たした作品として新しい文脈で再評価することが本論文の二つ目のポイントである。

映画『祇園祭』は、京都府の各機関と府民が力を合わせ、協力して出来た結果であり、「京都アイデンティティ」に大きな影響を与えたものである。『朝日新聞』（一九六八年二月二十八日）は、「武士たちは戦うことしか知らないなかで祭りによって平和を招来させようとする市民の姿を通して今に続く京都市民のたくましいエネルギーを画面いっぱいに誇示した映画でも言える。それ『映画『祇園祭』』筆者注はまた明治百年というようなケチなものではなく、一千年以上の伝統を持つ京都の誇りを歌っているとも受け取れる」と、国家プロジェクトの明治百年を批判しながら、国家権力によら

ない市民の力によって復興された「祇園祭」を称揚し、自治の伝統において京都が東京より優っていることを強調した。

京都における明治百年は近代日本の歴史認識をめぐる「記憶の内戦」に際して「京都アイデンティティ」という歴史的にも文化的にも対抗的な「真正な日本アイデンティティ」を提示していた。それは「明治百年祭」の公定歴史認識を相対化するものであり、映画『祇園祭』はその象徴であった。

この時期に増加する観光客は京都という空間に身を置くことで、明治百年の近代化の歩みを相対化できる歴史性を体験することになったと言えるかもしれない。ちなみに、「明治百年」と言っても、京都の人々から見るとあまり実感がなかったのかもしれない。京都人にとって、大きな変化や戦争経験というのは第二次世界大戦でもなく、まして明治維新でもない、応仁の乱なのである。それをテーマに掲げた映画を撮影し、日本全国の国民に見せることで日本人の脳裏の「京都イ

メージ」に影響を与えたのではないだろうか。もちろん「京都イメージ」は映画『祇園祭』によって作られたのではない。「京都イメージ」に関するこれまでの研究では、映画『祇園祭』と「京都イメージ」を結びつけたものは存在しない。

最後に、映画『祇園祭』は二〇〇七年九月一日に、退色の進んでいたフィルムを監督の山内鉄也や美術監督・井川徳道の色彩、大阪芸術大学教授・太田米男、株式会社IMAGICA ウェストが復元作業を進め、原版からニュープリントが作成された。同年一〇月、一月には記念上映会が行われた⁴⁰⁾。この映画は権利関係の都合でビデオやDVD等などのソフト化や名画座での上映が一切されず、京都文化博物館フィルムシアターで毎年祇園祭の時期に行われる上映が唯一の機会となっている。つまり、この名画を観える人が今日では非常に少ないのである。京都の歴史、文化、あるいは暮らしをもっとたくさんの人に見せ、京都をブランド化するためにも、映画『祇園祭』をより効果的に利用する

ことが必要なのではないだろうか。

資料① 映画『祇園祭』ポスター



資料② 紙芝居『祇園祭』



資料③ 紙芝居『祇園祭』



- (1) 内閣（一九六八）『明治百年記念関係行事等概況』内閣総理大臣官房
一五七、一六〇、一六三、一七、一七八、一八頁。
- (2) 『読売新聞』（一九六六年一月三日）朝刊。
- (3) 河内将芳（二〇〇七）『祇園祭と戦国京都』角川叢書。
- (4) 『読売新聞』（一九六八年一月一八日夕刊）。
- (5) 『朝日新聞』（二〇二四年七月八日）夕刊、三版。
- (6) 『毎日新聞』（二〇〇八年七月二日）大阪朝刊。
- (7) 『読売新聞』（二〇〇八年七月二日）大阪朝刊。
- (8) 『朝日新聞』（一九八一年七月二日）朝刊。
- (9) 『朝日新聞』（一九六七年八月三日）東京夕刊。
- (10) 『読売新聞』（一九六七年八月三日）夕刊。
- (11) 同上。
- (12) 『都文化博物館フィルムシアタープログラム』二〇一三年七月頁。
『祇園祭記念特別上映』『祇園祭』七月一日、一六日、一七日。
一九六八（昭和四三）年日本映画産業協会作品／二六七分・カラー
製作：小川衿一郎、久保圭之助、浮田洋一、遠藤嘉一、荻常則、中岡
清、加藤彰朗、鈴木一成 原作：西口克己 企画：伊藤大輪 監督：山
内鉄也 脚本：鈴木尚之、清水邦夫 撮影：川崎新太郎 音楽：佐藤
勝 美術：井川徳道 照明：中山治雄 録音：野津信男 編集：河合
勝巳 記録：田中美佐江 擬斗：尾形伸之介 出演：中村錦之助、新谷、
滝花久子（いち）、佐藤オリエ、お鶴、岩上志麻（あやめ）、永井智雄（河
合又四郎）、田中邦衛（権次）、志村喬（伝右衛門）、田村高廣（助松）、斎
藤美和（お兼）、藤原釜足（源蔵）、大里健太郎（常七）、大木晤郎（平太、
橋本仙人（佐助）、沢淑子（佐助の女房・およし）、香川良介（文助）、山
口俊和（文七）、小沢栄太郎（門倉十太夫）、浮田左武郎（泉盛徳十太、
有馬宏治（柳家辰右衛門）、御木本伸介（丹波屋伝蔵）、三船敏郎（能左、
尾形伸之介（岩十）、下元勉（山科言繼卿）、渥美清（伊平）、北大路欣也（於

菟、関根水二郎(祇園仕神宮、下条正巳)(山科甚兵衛、堀止夫)(頭領、市川裕二)(百姓、加藤浩)(政府前の開闢、田中浩)(中組路地開闢、河村満和侍、春路謙仁)(白髪翁、中村時之介)(関所の役人、玉生司郎)(幸領、松山英太郎)(職人六、鈴木晴雄)(職人二、大東良)(職人三、片岡半蔵)(彦彦、遠山金四郎)(騎馬の侍、伊藤雄之助)(赤松政村、伊藤寿章)(細川晴元、高倉健)(異組代表、美空ひばり)(町衆六、香山武彦)(同B、中村實津雄)(同C)

応仁の乱以後、京の町は絶え間ない戦禍の渦に巻き込まれ、農民たちの不満は土一揆となって爆発した。混乱の中、町衆は丸一丸となって農民たちと対決、一般民衆同士が戦い、多くの尊い命が奪われていった。染物職人・新吉は、母を一揆を取り締まる役人に殺された。町も戦火で焼け落ち、侍への不信任が募っていった。そこで新吉は町衆は、自らの手で町を守り殺し合いではない、町衆らしいやり方で侍に対抗しようと考えた。その団結力の証として、三十年間途絶えていた祇園祭の復興を決意する。一九六八(昭和四三)年、スターの独立プロダクションによる合作大型映画が日本映画界に一条の光を投げかけた。石原プロと三船プロによる『黒部の太陽』と本作『祇園祭』が連続して公開され大ヒットを飾る。本作『祇園祭』は一九五〇(昭和二五)年、立命館大学の林屋辰三郎教授が中心となって紙芝居『祇園祭』を製作、巡回公演したことを発端とする。これは、応仁の乱後に京町衆たちの自治体制がつかわれ、その市民的なエネルギーによって祇園祭が復興された史実を紙芝居にしていたもので、当時京大の学生であった大島渚、加藤泰も参加していた。この企画に興味を持った伊藤大輔監督はこの紙芝居台本を入手、映画『祇園祭』の企画を始める。一九六二(昭和三七)年、西口克己が紙芝居『祇園祭』と同じ史実に基づく同名小説を発表、伊藤監督はこの小説を底本に中村錦之助主演で映画化する企画を東映に提出する。検討の結果、製作費がかさみすぎるといって東映は映画化を断念す

る。そして七年後、プロデューサー・竹中労が府政百年記念事業として京都府に企画を持ち込む。「京都は日本映画の発祥の地であり、そこから、産業としての映画復興の狼火を上げるのは、実に意義あることだ」と京都府は全面的バック・アップを表明、日本映画復興協会の名の下、映画『祇園祭』の製作は始まった。本作は当初、原作者「プロデューサー」一脚本家監督相互のコミュニケーションを欠き、構想・企画段階からのスタッフ・竹中労、八尋不二、加藤泰、伊藤大輔らの名が途中で消える等の紆余曲折を経てクランクアップ。ストーリーは企画時と比べて、革命・自治からロマンスよりに若干アレンジしなおされ、中村錦之助・岩下志摩をメインに、三船敏郎、美空ひばり、高倉健、北大路欣也らがゲスト出演するという俳優陣の豪華さが一つの見所となった。公開は通常の日本映画系ではなく、洋画系映画館でロードショー公開された。今回上映のプリントは大阪芸術大学の太田米男教授が中心となり、本作の監督である山内鉄也氏、美術監督である井川徳三氏の監修のもと、IMAGICAウエストの最新の光学的技術で調整プリントしたものです。

(13) 『読売新聞』(一九六八年一〇月一七日)夕刊。

(14) 同上。

(15) 同上。

(16) 『読売新聞』(一九六八年二月一五日)朝刊。

(17) 『朝日新聞』(一九六八年二月三日)東京夕刊。

(18) 註(17) 同上。

(19) 『読売新聞』(一九六九年三月五日)夕刊。

(20) 河内将芳(二〇〇七)『祇園祭を戦国京都』角川叢書 三八頁。

(21) 河内前掲書 三九頁。

(22) 京都市統計書(一九六〇・一九七五)京都市役所。

(23) 『特集「早春の古都・京都・くらま」奈良』(一九六八年三月号)、『特集「小京都全国だが、中身は京都が多い」』(一九六九年四月号)、『特

集／京都』（一九六九年一〇月号、『特集／京都の夏祭り』と万国博見物法（一九七〇年八月号、『特集／京都の冬』（一九七三年一月号、『特集／歴史を旅する（京都が多い）』（一九七三年二月号、『特集／古寺再訪・紅葉の京都』（一九七四年一月号、『特集／京のおんな・古都の秋ひとり旅』（一九七五年一月号）

(24) 『朝日新聞』（一九六八年一月二十八日東京夕刊。

(25) 「よみがえる映画『祇園祭』」一〇、一一月に一般公開、二〇〇七年〇九月十八日

https://web.archive.org/web/20070811220414/http://www.kyoto-miopo.net/archives/2007/09/18/1011_1.php (最終アクセス日・二〇一五年一月一九日)